

MACF 礼拝説教要旨

2020.09.20

「不条理な現実とキリストによる勝利」

「ローマの信徒への手紙 7 章 7 節～

7:7 では、どういうことになるのか。律法は罪であろうか。

決してそうではない。しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。

たとえば、律法が「むさぼるな」と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう。

7:8 ところが、罪は掟によって機会を得、あらゆる種類のむさぼりをわたしの内に起こしました。

律法がなければ罪は死んでいるのです。

7:9 わたしは、かつては律法とかわりなく生きていました。

しかし、掟が登場したとき、罪が生き返って、

7:10 わたしは死にました。そして、命をもたらすはずの掟が、死に導くものであることが分かりました。

7:11 罪は掟によって機会を得、わたしを欺き、そして、掟によってわたしを殺してしまったのです。

7:12 こういうわけで、律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです。

7:13 それでは、善いものがわたしにとって死をもたらすものとなったのだろうか。

決してそうではない。実は、罪がその正体を現すために、

善いものを通してわたしに死をもたらしたのです。このようにして、罪は限りなく邪悪なものであることが、掟を通して示されたのでした。

7:14 わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。

しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。

7:15 わたしは、自分のしていることが分かりません。

自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。

7:16 もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。

7:17 そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。

7:18 わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。

善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。

7:19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。

7:20 もし、わたしが望まないことをしているとすれば、

それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。

7:21 それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。

7:22 「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、

7:23 わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、

わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。

7:24 わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。

7:25 わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。

このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。

8:1 従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、

罪に定められることはありません。

8:2 キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。

\*\*\*\*\*

1) 私たちを断罪することになる神の律法は罪・悪なのか？

もし、律法がなければ、私たちは罪に定められることはないわけだから、律法の存在自体が悪なのではないか、とある人は問います。

「そんなことはない」とパウロは言います。律法があるからこそ「何が悪で何が善なのか」という基準が分かるのだから、律法自体が悪ではないとパウロは語ります。

2) 律法の望まないことを行う傾向性

私たちの中には善悪の基準としての律法があるにもかかわらず、心のどこかに「それを破ってみたい」「律法の思い通りに生きたくない」という意識が存在しています。

まさに、それこそが「原罪」と言われているもののもたらす後遺症のようなもので、私たちは生まれながらにして「無邪気」のままにいられない自分に気づくのです。いつの間にか、誰に教わったわけではないのに「心に邪気」が溜まってきます。そして、自分では不本意でないように感じながらも悪を楽しもうとする傾向があることがわかります。

パウロは、その心を

7:18 わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。

7:19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。

7:20 もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。

7:21 それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。

7:22 「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、

7:23 わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。

と表現しています。

3) 素直な自分はどこにあるのか

善悪の基準は持っているけれど、常に善だけを選べない弱さがあると気づいたとき、その弱さは

「罪の影響下」にあるゆえの弱さなのだとパウロは語るのです。

自分でそれを実行しているのだけれど、それは罪に「させられているような」事態であり、心の中では神を喜びたいという思いがないわけではないのだということです。

この気持ち、わかりますよね。

私たちはここで「仕方がないですよ、人間なんですから」と言い切って、諦めてしまいがちなのですがパウロは違いました。

彼は

「7:24 わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。」と叫ぶのです。

このままでは、よくないと自覚しているのです。諦めてしまってはならない、もっと気分良く生きられる道があるはずだとパウロは語るのです。

でも、その新しい道に進むためには「なんと惨めな自分なのだろう」という自覚を通過しなければならないのです。

そういう自覚こそ、聖霊が助けてくださって、私たちの心の中にもたらしてくださる気付きです。

#### 4) 重大な気付き

7:25 わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。

このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。

心と身体の行動が分離しているような生き方をパウロは指摘しています。

必ずしも、自分は信じていることがらと行動が合致していないということをパウロは認めているのです。

しかし、そのままのわたしをキリストは迎え入れ、キリストの支配の下に置いてくださっているとパウロは自覚しているのです。

キリストを信じたら、人格的に完成するわけではなく、生き方は相変わらず昔のままということも多くあるだろう、しかし、そういうあなたが自分の足りなさを自覚しながらイエス様を信頼しながら歩むなら、あなたの行いは昔のままとしても、あなたの存在はイエス様の主権のもとに置かれていて神様からの断罪は処理済みの人間として生きていけますよということなのです。

この世にあっては、断罪もされ、非難もされることがあるでしょう。イエス様を信じてても人格的な完成は即座にもたらされるものではないからです。相変わらず、酒飲みで、喧嘩早い人もいますでしょう。しかし、それゆえにこの地上で失敗し、批判され

非難されることがあるとしても、あなたは神の赦しを得ているのですということになります。

いつの間にかイエス様を信じると即座に、その人が聖人君子のような生活を始めないと失格だというような雰囲気が存在していますが、それは間違いです。この7章を読んでわかるように、死ぬま

で「人間臭さ」「罪人の失態」はついて回ると考えて良いと思います。それは信徒も牧師も同じです。でも、幸いなことに、少しずつ神様は聖霊によって、私たちをキリストに似たものと変えてくださいますし、もっと嬉しいのは、最終的には私の罪はキリストによって既に処分済みになっているということです。

「良い人」になったフリをする人生は疲れます。

そして、いつか化けの皮がはがれます。

無理せず、あなたのままで良いのです。無理に自分を断罪したり、処理したりしなくて良いのです。あなたは、あなたで十分なのです。ただし、自分の足りなさを指摘されたとき、「そうなのです」と言える謙虚さは身につけたいですね。

イエス様は既に、私の一生の間に犯すであろう罪の全ての決済を十字架で済ませてくださいました。だからこそ、パウロは言うのです。

7:25 わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。

このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。

8:1 従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。

8:2 キリスト・イエスによって命をもたらず霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。

この真理が聖霊によって、あなたの心に深く届きますように。

祝福を心からお祈りします。

関根一夫